

本書発刊に寄せて

- 京都に想う、まねびの文化と創発の気魄 -

京都に帰ると、若き日の思い出が記憶の淵から次々と湧いてくる。その一つに、京都府教育委員会から大学院に派遣された現職の先生との論戦である。

「現場のことをわかってらん研究者から、つべこべと言われたくない」、はっきりそう言われたかどうか、その辺の記憶は曖昧であるが、少なくともそうした意味がビシビシと突き刺さってくるやりとりだった。当時、わたしは大学に職を得て間もない、確かに現場知らずの「青い」研究者だった。

こうした現場の先生が大学院を修了し、現場での実践を交流した際に「あきまへん、理論は現場では使えません」といった話をしたことも記憶にある。

本冊子は、京都府総合教育センターが取り組まれてきた「学校組織マネジメント」特別講座をはじめとする研修企画・実施の経験と学修をもとに、気魄を込めてまとめられた学校組織活性化のためのガイドブックである。わたし自身も、講座の講師を務めさせていただいたが、研修の担当者から配付資料の差し替えを依頼されたり、何かと注文の多い講座である。

この講座は、5回シリーズであり、全体のストーリーが綿密に組み、なおかつ各回の目標とコンテンツが練られており、しかも、地元京都の企業との連携による内容をも配し、実に「内外資源活用」の好例である。それがわかるだけに、講師としては、いかにその目標を限られた時間の中で達成するか、悩ましいと感じるが、講師の依頼を断れない。なぜなら、講座での緊張感と終わったときの効力感が心地よいからである。

本冊子を通読していくと、諸先輩の見識とともに、随所にわたしの書いたもの、話したことも取り上げていただいているが、必ずアレンジが施してある。そのアレンジをみて、やられたと思う。わたしの語りが、学校現場の視点から新たな息吹として吹き込まれ、これまで浅野良一さん（兵庫教育大学教授）とともに創り出してきた研修テキストを超え、他の方々の見識とのハーモニーを醸し出した見事な内容として仕上がっている。研修のテキストとしても、現場のミドルリーダーの先生方の自学にも使えると考える。

あの論戦から20年近い歳月が流れたが、この間の交流がこうした形で結実したことをうれしく思うとともに、わたしもこのまま引き下がる訳にはいかないと考える。さらにフィールドワークを重ね、また理論の精度を高められるよう学校組織研究に精進したい。そのためにも、本冊子が研修講座や現場で活用され、改善を加えられるとともに、学校での実践を通じて、「理論ってほんまに学校に役立ちまん」と言い合えるような研修講座の講師を務めたい。

また京都府教育委員会が平成20年度から始められようとしている「『教師力向上』教育実践力継承事業」にも積極的に関わっていきたいと、今からその構想を温めている。

まねびが智慧を解発し新たな知識を生み、異種の知識の衝突が新たな認識を創発する。

そんな関わりが持続する批判的友人関係を結べたことに感謝しつつ

名城大学教授 木岡一明